慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

| | |
|---|---|
| Title | 『ふくろうのさうし』の成立 |
| Sub Title | |
| Author | 石川, 透(Ishikawa, Toru) |
| Publisher | 慶應義塾大学国文学研究室 |
| Publication year | 1988 |
| Jtitle | 三田國文 No.10 (1988. 12) ,p.36- 42 |
| JaLC DOI | 10.14991/002.19881200-0036 |
| Abstract | |
| Notes | |
| Genre | Departmental Bulletin Paper |
| URL | https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00296083-19881200-0036 |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 『ふくろうのさうし』の成立

石川　透

## はじめに

約四百編現存している室町時代物語は、明治時代以来多くの先学により分類が試みられている。長谷川福平氏の五分類、平出鏗二郎氏の十分類、島津久基氏の十五分類等がそれである。戦後これらをまとめあげ、六分類を確立なされたのが市古貞次氏の『中世小説』（昭和26年）や『中世小説の研究』（昭和30年）であった。市古氏は、中世小説に扱われた世界（舞台、主人公を含めて）を中心として、

一、公家小説
二、僧侶小説
三、武家小説
四、庶民小説
五、異国小説
六、異類小説

の六つに分類なされたのである。市古氏の分類方法は、最も優れたものとして、現在の定説となっている。

この六つの世界においては、それぞれのグループ内の作品が深く関わり合っている。しかし、無関係とみられがちな他のグループとも深く交渉していることがある。今回は、異類小説と僧侶小説とが、意外に深く関わり合う具体例をみていきたい。

本誌前号に紹介した天理図書館蔵『ふくろうのさうし』は、その名の示す通り、異類物に属す一作品である。そして、同じく異類物に属す『ふくろふ』との関係について、その若干を記しておいた。しかし、『ふくろうのさうし』の成立を考察する上で重要な作品は、他にも存在するのである。僧侶物に属する『車僧』がそれであり、この作品の存在によって、『ふくろうのさうし』『ふくろふ』を包み込む大きな問題が浮上してくるのである。本稿では、これらの作品の関係を捜り、『ふくろうのさうし』の成立について考察していきたいと思う。

## 一、車僧との関係

室町時代物語には、『車僧』と題する作品が二種類ある。一つは、『松姫物語』『いとさくらの物語』等の異名をもつ『車僧』であり、

もう一つは、謡曲『車僧』を絵入本に仕立てた『車僧草子』である。両者とも主人公とする人物は同一人であり、前者が車僧の前半生、後者が車僧の後半生の出来事を記したものといえよう。今回問題とするのは、前者の『松姫物語』系の『車僧』である。

最初に、この『車僧』の物語の概略を記しておこう。

昔、中頃のこと、都に車僧という発心者がいた。その車僧の由来を尋ねると、宮中に隠れもなく住む人であった。彼が二十歳余りの頃、ある女房に懸想をし、その下女を通じて手紙を通わせた。その後二人は契りを結んだが、男の父母は不満である。そこで、男が清水参籠をしている間に、母親はこの女房を北野参詣へと誘い、ある男に切り殺させた。一方、男は、女房がいないことに気付き、再度清水に参籠する。観音の示現によって、京・近江・美濃・尾張・京・大和・河内へと尋ね歩く。見つからずに北野天神に祈りに行くと、捜していた女房と老僧に出会う。男女は三年ぶりの再会に涙を流す。女が、母親に連れられて来て捨てられた話をすると、それは男の夢であった。そばにいた老僧に尋ねると、老僧は女房が切られた時の話をする。男は、これを善知識として発心し、小車に乗って路を巡ったので、人々から車僧と呼ばれた。その後も、車僧は、人を救うために仏法を説き続けたのである。

この概略は、『ふくろうのさうし』に最も近い本文を有する、御巫清男氏旧蔵本系統の『車僧』をもとにしている。

ここで、『車僧』に、どのような系統の本が伝存しているのか、松本隆信氏「増訂室町時代物語類現存本簡明目録」(『御伽草子の世界』昭和57年)の「くるま僧」の項を、多少補う形で記しておこう。

A　東洋大・大永6年絵巻(仮題「松姫物語」)　小一軸　《続岩波・御伽草子絵巻・大成十二》

B(一)京大国文・写本　横一冊　《京都大学複製》

御巫清男旧・奈良絵本挿絵欠　横二冊　《大成四》

京大・同右昭和15年小川寿一写本　横二冊

小野幸・奈良絵本挿絵欠　横二冊

(二)石川県本誓寺・写本(内題「いとさくら」)　大一冊　《大成補一》

このように二系統三種の伝本が知られている。これら以外に、謡曲『車僧』と同内容の『車僧草子』が存在しているのである。実は、掲出の『車僧』伝本のうち、B(一)本誓寺本には、謡曲『車僧』の記述がみられ、『車僧草子』とも関係する。しかし、全体の内容からすれば、『車僧草子』は離れるので、ここでは考察の対象外としたい。

『車僧』の伝本のうち、従来最もよく知られていたのは、A東洋大学所蔵の「松姫物語」と称する伝本である。大永六(一五二六)年の書写であるから、室町時代物語としても、確実に成立が遡れる貴重な作品の一つとなっている。大筋は、前述のB(一)御巫本の概略と同様であるが、小異もままみられる。文章自体には大きな相違があり、記述の分量も、A系統はB系統の半分程度のものである。A Bの先後関係は、他の同時代物語と同様に確定しえない。

『ふくろうのさうし』は、このような『車僧』伝本のうち、B系統本の冒頭の記述と深く関わっているのである。B系統には二種類あるが、どちらかといえば(一)類の方が近いようであるから、B(一)系

統のうち、御巫本を底本として、『ふくろうのさうし』と比較してみたい。

前述の概略だけからでは、その関係ははっきりしないが、『車僧』を詳細にみていくと、『ふくろうのさうし』と明らかに関係しているのである。『車僧』の最初に、後に車僧になる男が、ある女房に懸想し、手紙を送る場面がでてくる。そのやりとりの仕方に、『ふくろうのさうし』の記述の中心である手紙のやりとりが重なるのである。

『車僧』冒頭は、車僧の紹介の後に、男が花を見てたたずむ所に、女房を見て忘れられなくなることから始まる。この場面設定は、『ふくろうのさうし』冒頭の、則次の紹介の後に、花を詠めに行くと、五位の少将を見染め、恋の思いになっていく、という設定と全く同じである。

その後、『車僧』では、男の両親が心配する話が入り、男が女房の下女に会って、女房への思いを打ち明ける。『ふくろうのさうし』は、両親の記述はないが、少将に仕える白鷺に出会い、少将への思いを話すのである。この話の展開の類似は明らかであろうが、男側が胸の内を話す内容は、使用語句にまで近いものがみられるのである。この場面を対比できるように引用すると、

『車僧』

申いたすも、われなから、うきみのほうも、しらつゆの、おき所なくはちいり、ははかりおほき事なれとも、申さても、〔さて〕いかゝせん、いつそや、やうめいのあたりにて、花のゆふはへに、一めみそめし、はつはなの、いろよりやかて、わか心をそめなす、くれなゐの、なみたもそてに、あらはれて、人めにあまり、せんかたなき、いつまて、いけのはちす〔は〕に、そてにほひの、たき物の、ひとりはいかゝ〔と〕、おもはれて、けにや、をさゝの一ふしは、なにか、くるしかるへきと、くわしく、かたらひよりけれはそめなすからあいの、やしほも浅き袖の色、こかれあふみの悲しさに、此御寺にまいり、御ちかひをたのみたてまつる。その甲斐ありて、けふしも御身にあひたてまつる事、只他生のえんなりと、くはしく是をかたりけれは

『ふくろうのさうし』

申につけて憚おほく、又はうちつけなるやうに侍れとも、いつそやそのあたりの花の盛の折ふし、なかめゐ給ひし少将殿の御姿、一目見しより我心、ふかく

そのほか、点線部は類似する語句を示している。途中に、相違部分もみられるが、両者のいうところは、かなり近いとすべきであろう。このような語句上の類似は、室町時代物語においては、同一題名下の異本関係によくみられる類似の仕方である。

これ以後、『車僧』では、下女が間に立って、男の歌を女房のもとに運ぶが、女房は中身も見ずに返してこいという。この点も、『ふくろうのさうし』で、白鷺が、則次の歌を少将に持っていくが、見もせず返せということと同内容である。

『車僧』では、下女が説得し、女房は文を見る。しかし返事はせずに文を送り返すと、男は、さらに歌を作って送りつける。『ふくろうのさうし』では、少将は文を見ないものの、送り返した後に、則次がさらに歌を作り送っている。

そして、両者とも「一筆の御返事」をとの説得を受けて、女側が歌の返事を書く、という点まで、内容的に近い面が続いているのである。その返事の歌を記してみると、『車僧』では、

思ひきや、なかめし花の、比すきて、くものまよひの、のこるへしとは

とあり、『ふくろうのさうし』では、

たのましな、立ゐる雲の、あたにのみ、心さためぬ、花のまよひは

と記されている。同一歌とは言い難いが、「花の」「くもの」「まよひ」等の同一語句が使用されているのである。

その後、『車僧』では、二人は深く契るが、男の母親により離別させられ、男が車僧になっていく話が長々と展開する。一方、『ふくろうのさうし』は、則次と少将が結ばれ、子供もでき幸せのうちに物語が終っている。

このようにみてくると、『ふくろうのさうし』は、『車僧』冒頭の幸せに契る時期までの記述に非常によく似ていることがわかる。ここまでの記述の量も両者近い。登場人物が人か鳥かの違いはあるものの、その物語の筋、使用語句には、不可分の関係がある。とすると、両者はどのような成立関係にあるのだろうか。一方の物語が他方の物語へ影響を与えたのであろうか。その手懸りとなるものを、本文の中から捜してみよう。

『ふくろうのさうし』には、白鷺が、則次に対して、

あれの上鴈も花の木陰にて、見馴ぬひとを見給ひて、はつかしなとゝつねに語られ候なる。

と言うことばがある。自分が仕える少将がこう語っていた、と言っているのであるが、ここに「あれの上鴈」という語句がでてくる。「あれ」は一人称でよいとしても、「上鴈」という語句は耳慣れず、誤写があるかとも考えられる。ところが、『車僧』には、この場面が、

あれの上らうも、人めあらしの、花のもと、をかしきさまを、みえしこと、はつかしさよと、おほせ候し

と記されている。ここに、「あれの上らう」とあることから、「上鴈」とは、「上らう」を言い換えたか、あるいは、「上廊」を誤写した語句ではないかと想像がつく。登場人物が鳥であるために、「上らう」ということばは使えず、このような表現にしたのかもしれない。このような例をみると、『ふくろうのさうし』は、『車僧』の冒頭をもとに、登場人物を鳥にして翻案した作品ではないか、と思われるのである。

## 二、『ふくろふ』との関係

それでは、前稿に記した『ふくろふ』と『ふくろうのさうし』の関係は、どうなるのであろうか。実は、『車僧』は、従来知られていた『ふくろふ』とも連がりがあるようなのである。『ふくろうのさうし』のような語句上の関係にまでは到らないが、その内容は、前稿の『ふくろふ』概略と、本稿に記した『車僧』概略と比較してみればわかるように、似た面があるのである。男側が女側を見染め、手紙を仲介者によって届け、恋は成就する。しかし、女側は殺され、男は出家する、という大筋は同一の話型である、といえよう。また、両者とも、その文章に七五調の雅文が多く使用され、文体的にも近い。

さらには、男側が、諸国巡りをする点でも一致しているのである。室町時代物語には、『村松物語』『もろかど物語』等の武家物や、『雀の発心』『雀さうし』等の異類物に、多くの諸国巡りがみうけられる。全国各地の寺社への祈願や、人捜しがその大きな目的である。しかし、その巡路を詳しく調べると、さほど一致するものではない。ところが、『車僧』と『ふくろふ』東大国文学研究室本は、その巡路が、近江から京、大和、摂津方面へと向う点で、近似しているのである。

『ふくろふ』東大本は、主人公の官職名が「ふくろうのむくのすけ」とある点で、『ふくろうのさうし』と一致していた本であった。いわば、『ふくろうのさうし』とも近い面を有していたのである。とすれば、『ふくろふ』東大本は、『車僧』にも『ふくろうのさうし』にも近い本ということになる。

残念なことに、『ふくろふ』は、『車僧』と『ふくろうのさうし』の関係ほどには近似していないが、話型から考えて、両者と何らかの影響関係にあると思われる。『ふくろふ』には、古写本が存在しないこと等を考えると、『ふくろうのさうし』と同様に、『車僧』の影響を受けて成立したものかもしれない。『ふくろうのさうし』は、『車僧』冒頭部に直接的な影響を受け、『ふくろふ』は、『車僧』全体の話型に影響されて、ともに「ふくろう」を主人公に置き換えて成立したことも考えられよう。いずれにしても、『ふくろふ』は、仮名草子の『あだ物語』や『薄雪物語』等に、強い影響を与えている作品であることを考えれば、看過できないであろう。

それでは、主人公を「ふくろう」とした場合、どのようなことから、「むくのすけ」とか「則次」とかいう名が付けられたのか、考えてみよう。

## 三、鳥類の命名法

室町時代物語異類物においては、その登場人物名に、一つの特徴がある。それは、その動植物自身の属性が、名前や官職名となって表われ易い、ということだ。『精進魚類物語』の「鯛赤助鮭吉」や「鮑入道」は、その好例といえよう。『のせ猿さうし』の「ましおの権頭」や「こけまる」も、「猿尾」や「こけざる」からの連想によるものであろう。

鳥を主人公とする異類物にも、そのことはあてはまる。一条兼良作とされる『鴉鷺記』では、鴉の「東市祐真玄」や、鷺の「山城守正素」が登場する。その名前に、鴉の黒、鷺の白の意が含まれていることは明らかであろう。そして、この『鴉鷺記』には、ふくろうも登場しているのである。ここでは、「梟木工允法保」という名をもっている。『ふくろうのさうし』では、「ふくろうのむくの介則次」であった。「木工」寮の役人であることと、名前に「ノリ」の字が入ることで両者は一致している。木工寮は、いうまでもなく、大工以下の職工を支配する役人である。ふくろうのイメージからすればふさわしい役職といえよう。

それでは、「ノリ」とは何であろうか。実は、この「ノリ」もふくろうの属性というべきもののようなのだ。『鴉鷺記』には、梟の言として、

明日ノ雨ヲ、知リテハ、糊スリ置ト鳴キ、老者ニ、告レ死、其声、呼レ犬、鼠ヲ取事、猫ハヅカシク、鳥ヲ取事、鷹ニモ似タリ（『室町時代物語大成』二）

と記されている。ここには、ふくろうの鳴き声として「糊スリ置」とでているのである。テキストとしては新しくなるかもしれないが、狂言『松山』にも、

あら、とぜんや我が寺の、〳〵、のりすりおけと、とふものもなし（『大蔵虎明本狂言集の研究』本文篇中）

という梟の言葉があるから、当時の人々が、ふくろうの声を「のりすりおけ」と聞いていたことは事実のようである。

むろん、今日と同じように、「ホホン」と聞いていた例も狂言『ふくろふ』等に見出すことができる。しかし、今日でも、方言として、ふくろうの鳴き声を「のりつけほうせ（糊付乾）」と聞いている例はあるのである。「のりすりおけ」でも「のりつけほうせ」でも、糊をすりつけるとか、糊付をほせるとか、翌日の天候を予知することばとして聞き取っているようだ。とすれば、『ふくろうのさうし』の「則次」という名も、本文中にみられる、

空の気色もはれぬれは、のりつけ〳〵との給ふ

という記述も、当時のふくろうの鳴き声への理解から記されていることがわかるのである。『鴉鷺記』の「法保（ノリヤス）」も、形は少し異なるが、このようなふくろうに対する理解から名付けられたものと思われる。

『ふくろうのさうし』では、ふくろうの恋の相手として、鴈と思われる「五位の少将」が登場している。こちらは、名前まではでてこないから、官職名が問題となる。「五位の少将」として室町時代物語に登場する動物には、『勧学院物語』の「さぎの五ゐのせうしやう」がいる。その本文中に、

さて。せう〳〵どの、申されけるは。われはこれ、ゑんぎのみかど、しんせんゑんの、いけのほとりに。みゆきなりしとき。御まへにまいり。五ゐのくはんを、くだされしものなり。（『室町時代物語大成』三）

と自ら述べているように、延喜帝から五位の冠をいただいた、とされている。これは、『平家物語』巻五や謡曲『鷺』で有名な話である。鷺と鴈の違いはあるが、「五位の少将」の淵源は、このようなところにあるのではなかろうか。ちなみに、『勧学院物語』にも、『ふくろうのさうし』と同じく、近江の「だいご」が登場するが、直接には関わらないようだ。

以上のような命名法は、その異類の詠む和歌とも深く関わっている。すなわち、異類物には、多くの歌が詠まれているが、その中には、詠み手の属性や、名前そのものが詠み込まれていることが多いのである。『ふくろうのさうし』をみても、最後に連ねられる諸鳥の歌には、「からす」「かり」「しらさぎ」「すずめ」といった語句が詠み込まれ、異類物の大きな特徴を現出しているのである。

## むすび

『ふくろうのさうし』は、おそらくは、『車僧』をもとにし、登場人物を『鴉鷺記』等の異類物と同様の登場人物に置き換えて、一編の物語に仕立て上げられたものと思われる。むろん、『車僧』を直接利用したのではなく、他の同類物語が間に入って作られた、とも考えうるが、両者が異本関係ともいうべき近い位置にあったことは間違いないであろう。従来知られていた『ふくろふ』も、『車僧』と父子あるいは兄弟の関係の作品ではあるが、『ふくろうのさうし』ほど影響は直接的ではない。しかし、『車僧』がもとの形であると

すれば、『ふくろうのさうし』と『ふくろふ』は兄弟関係の本ということができるであろう。

以上のように、僧侶物と異類物という、一見異なる作品ではあるが、グループを超えて、お互いが強く結び付いている実例をみてきた。以前、「『落窪の草子』の成立」(『芸文研究』47・昭和60年12月)と題して、公家物の『落窪の草子』と庶民物の『文正草子』が深く結び付く例をみた。これらのことから、室町時代物語は、その主人公の活躍する世界を超えて、深く関わっていることがわかるのである。このような例を考察し、集合させることによって、従来多く不明とされていた物語の作者像を浮び上がらせ、物語の成立を捜りたいと思う。